

論文

書体の変化と文化の変化——ロシアの事例から——

小林 潔

0: はじめに

本稿では、ロシアに於ける書体の変遷をとりあげ、その文化史との連関を考察する。また、日本での事象にも言及する。

ひとまず、文字関連の術語を学界および印刷業界の慣行にならい以下のように考えておく¹。

¹ これらの術語に関して『日本語学』が「特集字体」を組んでいる（第3巻第3号（明治書院、1984年））。同特集掲載の[菱沼 1984:32]では、「字体」は「文字の骨組み、文字のかたちについての概念」であり、「字形」はその「具体的なあらわれ」とされる。同じく[田嶋 1984:61-62]では「字体」とは「文字の骨格表現〔……〕その文字が文字として認知されるために必要な点や線の配置と構成」であり、「書体」は「一つの字体から一定の肉付けを与えられた文字のデザイン上の表現」。この他に[林 1984][野村 1984]らが興味深い考察を展開している。文字をめぐる術語の問題、また、言語・文字・書体の関係については、これらの議論をふまえて別稿を用意したい。なお、興味深い見地を与える先行研究として [原 1997]（『筆跡の文化史』）がある。日本の筆跡を最初期から現代まで追跡した論考である。「筆跡」とは「書かれ様（かかれよう）」≪Style of writing≫ [同書:19] であり、筆跡学（書相学）をふまえ、文化史的観点から筆跡の推移の意味を考察する。「筆跡性」と「文字性」 [同書:32]（パロールとラングを連想させる概念）、「文化独自の発展原理」という「自律」；「文化以外の諸事情から律せられる」「他律」の「二重構造」「両者の総合」として文化史をとらえる立場である [同書:82]。

「キリル文字」= 宗教、教育・研究用途

「ロシア文字」= 世俗用途 + 宗教用途ほか

現代（ソ連崩壊後）

「キリル文字」= 宗教用途 + 視覚効果を狙った世俗用途

「ロシア文字」= 世俗用途 + 宗教用途

こうした図式はどのように解釈出来るだろうか。その解釈は、日本語の文字史を考える上でも有益だろうか。文字が音の衣装であるならば、衣装にまつわる理論を応用することで、上記の図式が解釈出来るのではないか。本稿はそのような視点から見えてくるある解釈を提示する。

1：変遷の歴史³

スラヴ語に聖書を翻訳するために 862 年、キュリロス・メトディオス兄弟によって作り出された文字 グラゴール文字 は、やがてその体系をギリシア文字で置き換えることでギリシア化された。こうして出来たのがキリル文字である（ギリシア文字は、この子孫たる現在のロシア文字とも 19 個が音価・形状で共通とされる）。ロシアにはこのキリル文字がキリスト教化とともに伝わった。

キリスト教化とともにロシアに入った文字——キリル文字——は、そもそものはじめから宗教性を有していた（一般に文字の成立は宗教むしろ魔術 と関係している）。この文字は、18 世紀初頭にピョートル大帝（在位 1682 - 1725 年）により文字改革（字母の組成と書体の変更）が行われるまで使われたし、そしてその後も用途によっては使われている。

キリル文字は、楷書体 (устав)、行書体、草書体（このほかに装飾用組み合わせ文字 (врязь) があった）という書体で書かれていた⁴。書記史

³ ロシア文字史全般については [小林 2004] を参照されたし。ロシアに於けるラテン文字の使用も興味深い問題だが今は措く。

⁴ 「楷書体」などは現行の露和辞典でも採用されている訳語であるが、本来、漢字について用いられる術語である。こうした語がロシア語の術語の

料として現在まで伝わっているものに、年代記といった国史・歴史書、聖書に代表される宗教文献、行政文書、教育用読本がある。パーソナルな使用は、ノヴゴロド白樺文書には見られるが、一般的ではない。羊皮紙、紙、樹皮、石、粘土板、陶器といった様々なものに書かれた⁵。

文字がうつしとどめるところのロシアの言語に関しては、そもそもの始まりからダイグロシアと呼びうる状態であった。10世紀末、東スラヴ語圏（ロシア）に、キリスト教という文明とともに、南スラヴ語たる古教会スラヴ語が流入したのである。こうしてロシアの標準文章語（литературный язык）が形成されていく。14, 15世紀には東ローマ帝国の衰亡とともに南スラヴの知識人がロシアに入り、ロシア語は再び南スラヴ語の影響を受ける（第2次南スラヴ影響）。一方で、モスクワが政治の中心となり、当地の大ロシア人の話し言葉が大きく影響した行政用の言語（実務行政語 приказный язык）が用いられるようになった。15 - 17世紀の中期ロシア語である。

中期ロシア語の時代

教会スラヴ語（南スラヴ語） = 文語
 実務行政語（東スラヴ語） = 口語

書体では行書体が重要である。文語たる教会スラヴ語が行書体で書かれたロシア初の印刷聖書も行書体で刊行のに対し、草書体は、第2次南スラヴ影響を受けて行書体と異なる字母と正書法を有しつつ、実務行政語を表すために用いられたのである。実務行政語は教会スラヴ

訳語として適当か疑問視する声もあろう。本稿では従来の訳語を用いておく。便宜のためでもあるし、あえて新たな訳語を導入する必要も当座は無いと思うからである。

⁵ ロシアでは紙の生産は1565年から始まっている（使用はもっと前からであろう）。また、使用には宗教的見地からの抵抗があったとされる（参照：[Филякова-Меньшов 2002: 37]）。なお、年代がはっきりしているロシア最初の印刷物は1764年のもの。紙、筆記具というマテリアルな側面の研究が必要である。

語と対立、(その意味で)ロシア語的な言語環境を表すものであった [Успенский 1994: 60-64]。次世代のロシア語につながる要素を表現するものとして草書体が機能していたのであった。

行書体 = 宗教用途・世俗用途

草書体 = 世俗用途

18 世紀に入るとロシアはピョートル大帝のもと急速な西欧化を進める。文字も西欧化 ラテン化 された⁶(完全なラテン文字化はピョートルといえども不可能であった)。この時に出来たのが世俗文字 (гражданский шрифт) であり、これが現在で言うところの「ロシア文字」の直接の先祖である⁷。

ピョートルの文字改革は文化の改革を意図したものであった。この辺りの事情は [Живов 1986] に詳しい。

1708 年 1 月の段階でピョートルは「世俗書はロシア語で書かれ、世俗文字で印刷される。宗教書は教会スラヴ語で書かれ、教会字で印刷される」[Живов 1986: 56]とした。しかし、「そもそもはピョートルは、全ての印刷物を新しいアルファベットに移すことを意図していた。教会領域は、世俗の領域と同様に改新されたのである。教会書でキリル文字を保つことはこの場合、伝統的な教会文化へのピョートルの譲歩であった。礼拝書のフォントを変革することは伝統的意識には正教的スラヴギリシャ的敬神の拒否とうけとられたのである。[.....] 古いアルファベットは、頑固な教会文化の記号として記号論化され、新しいアルファベットは改新のシンボルとなったのである」[Живов 1986: 57]。このような

⁶ ピョートル時代を研究する Hughes も字体選択に「明確な文化的意図 (clear cultural intentions)」を認めている [Hughes 1998: 319]。

⁷ こうして、ロシア語表記のための文字には、18 世紀の世俗文字に由来する「ロシア文字」と宗教用の文字に由来する「キリル文字」の 2 つが存在することになったのである。ピョートル改革以前の文字 これもキリル文字と呼ぶ と区別するため「」で括る。なお、キリル文字は、スラヴ諸語やモンゴル語などで使われる、系統を同じくする文字の総称でもある。

1917-18年の正書法と字母の改革を経て、現代ロシア語の時代にあつては、宗教書（司祭の著作などを含むが、そもそもソ連期には少ない）も世俗書もロシア文字で印刷される（古ロシア語に関してキリル文字を使うことはあり、宗教書でキリル文字は依然として使われているが）⁹。従って、「ロシア文字」が無標であり、「キリル文字」は有標となる。

「キリル文字」= 特殊用途（一部の宗教書、教育・研究用文献）¹⁰

「ロシア文字」= 世俗用途 + 宗教用途

という図式が成り立つのである。

但し、ソ連崩壊を経た現代、20世紀末 - 21世紀では事情は少しく変わっている。帝政期の旧正書法を擁護する論が出されるようになったし、改革前の文学作品の復刻などで旧正書法が復活したり、旧正書法時代の字母や「キリル文字」の広告使用が見られるようになったのである（参照：[小林 2005]）。

「キリル文字」= 特殊用途 + 世俗用途（一定の視覚効果を狙う）

「ロシア文字」= 世俗用途 + 宗教用途

「キリル文字」の持つ有標性が効果を与えているのである¹¹。

⁹ 純粋な形で旧正書法が保たれているのは過去の司祭達の祈祷文書のリプリント・復刻のみであり、現代の著作は教会文書でさえ新正書法で刊行されている[Григорьева 2001: 403-404]。

¹⁰ ロシア語史の教科書・読本などで「キリル文字」を用いるわけである。もっとも、こうした教科書でも古ロシア語を便宜的に現行の「ロシア文字」で表記するものもある（例えば Кожин А.Н. Литературный язык Киевской Руси.—М., 1981.）。両者を別々の文字と考えると、これは翻字となる。

¹¹ なお、「書体」をめぐる以上の議論に於いて、同一文字の「字体」「キリル文字」「ロシア文字」という「字体」のの違いと考えても、同様のことが言える。[野村 1984]が指摘するように、一般に、

「(1) 同一の文字のことなる字体のあいだに、字形の複雑さのちがいがあ

2: 衣裳としての書体

言語にとって文字は衣裳であり、書体には衣裳としての機能があるとしてみよう¹²。「書体の機能 = 衣裳の機能」と考えるわけである。

さて、記号としての衣裳の機能を考えたのが「先覚者」ボガトウイリヨフ（1893-1970年）であった。彼は、衣裳を4分類し、その機能を考えている（『衣裳のフォークロア』（『モラヴィア・スロヴァキアの民俗衣裳の機能』（1937年））¹³。それを図式にまとめてみると以下のようになる（[ボガトウイリヨフ 2005: 56, 59, 128-129]及び旧訳[ボガトウイリヨフ 1981: 26, 31, 106]に基づく。漢字等一部改変）。

日常の衣裳（「普段着」）	実用的機能 = モノ
祝日の衣裳（「晴れ着」）	美的機能 地域、社会的地位・階級を示す 機能 = 記号
儀式の衣裳（大きな祝日）	
儀礼用の衣裳（花婿、花嫁などの「盛装」）	「一生に一度だけ着る」 （＝「一生にただ一度しか着ない」） 祝祭あるいは儀式の機能

るとき、そのちがいがおおきいほど、表現価値のへだたりもおおきい。

(2) 同一の文字のことなる字体のあいだで、ある字体が標準的なものとされるとき、それよりも複雑な字形をもつ字体は、プラスの表現価値をともなう。それと反対に、標準的な字体よりも簡略な字体をもつ字体は、マイナスの価値をともなう」[野村 1984:29]。

文字の「文体的価値」（「表現性」「表現価値」）[同:28]については別途考察したい。

¹² [原 1997: 195-196] でも服装に喩えられている（筆の筆跡 = 和服、ペンの筆跡 = 洋服）。

¹³ ボガトウイリヨフの「諸機能からなる構造」という考え、及びその具体的な現れである衣裳論は現在なおアクチュアリティを有し、「今後の『引用』・応用も待ちのぞんでいる」[桑野 2005:28, 40]。本稿は、そのような応用の一つの試みでもある。

このうち第 2、第 3 をまとめて、「普段着」「晴れ着」「盛装」とすることが出来るだろう。いずれも、暑さ寒さから身を守るという衣裳としての基本的機能 = 実用的機能は持っている。また、「普段着」も美的機能を持つ。衣裳の機能は相対的である。書体に関しても、どの書体も、ことばをうつしとどめるといふ基本的・実用的機能は持つわけだし、美的機能はもちろん、使用者の出自・社会的地位すら示すであろう。

「一生にただ一度しか」使わない書体（あるいは文字体系）というものも 宗教儀礼といった用途のために 世界の言語のうちには存在するかもしれない。たとえば、漢字の隷書は儀礼用（少なくとも儀式のための）書体と言って良い。Вязь もこれであろう。

ここでは「普段着」が「晴れ着」が問題である。[ボガトウイリョフ 2005 及び 1981: 第 17 章] によると、両者の関係に以下のような幾つかのパターンが見られる（文言は一部改変）

「普段着」は「晴れ着」より古風
「晴れ着」が「普段着」より古風

「普段着」は着なくなった「晴れ着」
「普段着」に「晴れ着」の部分が使われている。

「普段着」「晴れ着」が別種類で、晴れ着は美的機能のみ。

「晴れ着」が「普段着」になる（土台が「晴れ着」で、「普段着」は仕事用に作り直された「晴れ着」）
「普段着」が「晴れ着」になる。
「普段着」の部分が「晴れ着」に使われる。

「普段着とはまず第一にモノであるのにたいして、祝日の衣裳はもっぱら記号であるともいえよう。普段着においては実用的機能が支配的機能となっているのにたいして、祝日の衣裳〔晴れ着〕では、美的機能のほかに、地域を示す機能、社会的地位・階級を示す機能、その他の諸機能、つまり衣裳そのものではなく衣裳が指示している種々の領域に属

する機能が、大きな役割を演じている」[ボガトウイリョフ 2005:129 一部改変]¹⁴。

文字が宗教とともに伝播し、何よりも聖典を書き記すためのものだったことを考えれば、ロシアの文字は、そもそものはじめは「晴れ着」であった。書体が分化していくが、これは「晴れ着」の「普段着」化と考えられる。

行書体 = 「晴れ着」

草書体 = 「晴れ着」を土台とした「普段着」

ピョートルの文字改革で新旧2つのアルファベット(書体)が出来た。「古いアルファベットは、頑固な教会文化の記号として記号論化され、新しいアルファベットは改新のシンボルとなったのである」[ЖИВОВ 1986: 57]。そして、後者でも幾つかの部分 (Д, Т) は前者から伝統的な形状を採用したのであった。つまり、晴れ着から持ち込んだのである。

「キリル文字」(「教会文字」) = 「晴れ着」

「世俗文字」 = 「普段着」(「晴れ着」の部分が使われている)

ピョートル自身はこの「普段着」を「晴れ着」としても(宗教の場面でも)使う気であった。この意図は現代ロシア語の時代、

「キリル文字」 = 「晴れ着」 「盛装」

¹⁴ 「普段着は主に物であり、それに対して祝日の衣裳は主として記号だといえることができる。普段着に支配的な機能は実用的機能であり、それに対して、祝日の衣裳〔晴れ着〕で重要な役割を果たすのは、美的機能、地域を示す機能、社会的地位をそれと示す機能などである」[ボガトウイリョフ 1981: 106 一部改変。強調原文]

¹⁵ 従って、「モノ」の「記号化」の問題が生ずる。衣裳に関しては[エーコ 1972]。

「ロシア文字」(世俗文字) = 「普段着」。これで儀式も可能。

という形で実現した。そして、特にソ連崩壊後、効果を狙ってあえて着なくても良い「晴れ着」を着ることも見られるようになった。そして、「ロシア文字」の古い字母(1917 - 18 年の改革以前の)をあえて用いることもある[小林 2005]。

「キリル文字」 「晴れ着」で普段の場に出る。

「ロシア文字」 「普段着」・「晴れ着」(旧字母)

ピョートルは新たな「普段着」を作りだし、どのような場所でもそれだけで過ごそうとしたのである。この衣裳は何よりも実用的で、美的機能も併せ持ち得て、しかし、地域・地位・階級を示すことはない。これが近代というものであった。現代では、ピョートルに由来する「普段着」でどこに顔を出しても恥ずかしくない。そうなるといにしえの「晴れ着」で目立とうとする者も出てくるわけである。

3 : 境界超越

晴れ着を土台として作られた普段着がやがて晴れ着としても使われるようになり、そして、再びいにしえの晴れ着がかつての場所を離れて、現代、普段着の間に登場した様を見た。

このような事象は、ボガトウイリヨフには見られない別の観点 や はり衣裳に関する から解釈することが出来る。異性装(トランスヴェスティズム (transvestism) あるいはクロス・ドレッシング (crossdressing)) である。文化のなかで性別によって異なる服装が定められているが、この中で異性のものと規定されている服を着用するのが異性装である(現代の日本で、男がスカートをはき、女がネクタイをするなど)。このとき性による上下関係があり¹⁶、上位の者の服を下位の者は着ても許容されるが、下位の者の服を上位の者が着るのはタブーとなっている(現代の日本で女性がネクタイをして 男装して 人前に

¹⁶ 当然のことだが、男女差別はあってはならない。

出るのは、奇異な印象を与えるかもしれないが、それほどの問題はない。しかし、男がスカートをはいて 女装して 街を歩くことは相当の覚悟が要る。男の服を女は着るが女の服は男は着ないのである。

ロシアに於ける書体とその使用域の変遷で注目すべきは、文化的逆転現象が起こってそれが文字に現れていることであった。表すもの表されるものそれぞれの方から図式化すると、

行書体 = 宗教用途	「キリル文字」 = 宗教用途
草書体 = 世俗用途	「ロシア文字」 = 世俗用途 + 宗教用途

宗教用途 = 行書体 「キリル文字」 + 「ロシア文字」

世俗用途 = 草書体 「ロシア文字」

これを異性装の観点から考えてみると、機能・価値と領域侵犯で 2 つの可能性が考えられる。

イ：世俗文字・「ロシア文字」が上位になった。男装になった。

「キリル文字」 下位の装束

「ロシア文字」 上位の装束

ロ：宗教文献が世俗文献よりも下に来た。

上位 宗教用途文献 行書体 \ 世俗用途 「ロシア文字」

下位 世俗用途 草書体 / 宗教用途 「ロシア文字」「キリル文字」

現在の衣裳の特徴はユニセックス化であろう。両性共通の単一の衣裳があり、それを外れたものはあえて何か（例えば女性性）を積極的に表現しようとするものである。皆が同じものを着ようになると他の人とは違うものを着たいのである。書体に関してもその傾向 単一化をふまえた多様性 があるかいなか、更なる考察が必要である。

4：日本の場合

上記のような現象は日本にも見られるものである。見られるところではない。日本は、楷書体・行書体・草書体といった漢字のセット、カタカナ・ひらがな、加えてローマ字、と世界にも類を見ない多様な文字セットを備えた言語を持つ国である。また、正字正仮名と新字新仮名との双方が用いられ、しかも、ルビという表現手段さえ持っているのである。このような国では各セットの相互関係は一層複雑となる。

共時的に文字状況を概観しても、たとえば、カタカナとひらがなの機能さえ判然としない。これらは書体の違いではあるまい¹⁷。実際の表記でも、「ハッキリと分かる」/「はっきりと分かる」とどちらもあり得る。年配の方が前者の方を用いがちだという印象があるが、ひらがなが続いて読みにくくなるのを避けるだけの機能とも言える。とはいえ、文体的機能を同時に持っていることは間違いない。正字正仮名やルビについても同様のことが云える（正字正仮名は、既に使用者のイデオロギーの表明の道具になっている¹⁸。

通時的な状況は更に複雑である。漢字の書体の機能も変遷しているのである。たとえば、現在

楷書 = 手書き及び印刷でのあらゆる領域で用いられる通常の書体、公文書ではこの書体での記入を求められる¹⁹。

草書・行書 = 手書きで用いられるか、書道か、あるいは芸術的効果を狙った書体

隷書 = 書道等、芸術的な価値のみを有する書体

¹⁷ 林大によれば、「平片〔仮名〕や〔ローマ字の〕大小は、〔……〕書体の差と見るよりも、〔……〕大きな文字系の中での、それぞれ相對應する別の文字系」[林 1984:12]である。歴史と機能に関して、漠然と以下のような図式を立てることが出来るだろう。

カタカナ 漢文・男 行政 和語表記用 外来語表記用

ひらがな 女手 文学 外来語表記用 和語表記用 現行一般用途

¹⁸ 「旧字」ではなく「正字」という名称を選ぶこと自体もその種の表明である。

¹⁹ 俗に「金釘流」というものもある。無教養の代名詞でもある。

である。楷書が「普段着」で且つ こう言って良ければ 「よそ行き」にも使えるのだ。行書を「普段着」にしている人もいる。しかし「よそ行き」と受け取られてしまうこともある。草書は「晴れ着」とも「盛装」とも言えよう。

150年前はそうではなかった。御家人の息子で江戸出身の岡本綺堂(1872 - 1939〔明治5 - 昭和14〕年)は江戸時代の文字学習を解説し以下のように述べている。

「この時代〔綺堂の描く江戸期〕には、手習師匠のところで教える文字は、仮名・草書・行書の三種類だけで、決して楷書は教えなかったのです。その当時は楷書というものを現今の隷書のように見なしていたので、普通一般には使用されなかったのです。

むしろ楷書を実用的の字として認めないくらいであったのです。現今の人達が隷書を知らぬといっても少しも恥にならないのと同じように、昔の人達は楷書が書けないといっても、決して恥にはならなかったのです。

公文書、その他の布達なども、必ず草書、即ち御家流が用いられ、出版物には多く行書が使用されていました。従って楷書というものは一種の趣味として習うくらいのもので、別に書家について習わなければなりませんでした」〔岡本 2001:144〔手習師匠〕〕。

「御家流」とは「江戸幕府が公文書の書体としてこれを採用」したもので「オフィシャル」な性格を持っていた〔原 1997: 100〕。なお、この他「唐様」と呼ばれるシナ元明の風を真似た書体があり、寺小屋によっては唐様も教えるところがあったという〔同書: 101〕。「知的」〔同書: 100〕な性格があり、知識階級に多く用いられ、また町人や農民にも使う者があったという。(「明の戦火をのがれた亡命者が多かった」直接の影響)〔同書: 97〕。亡命者に黄檗宗の僧が多かったということは、亡命聖職者によるロシアに於ける第2次南スラヴ影響を連想させる。

なお、勘亭流(装飾文字)も江戸後期木版印刷で出回った〔同書: 107〕。従って、

楷書 = 特殊領域
草書 = 公文書
行書 = 一般出版物

となる²⁰。草行書が通常であり、楷書を知っていると教養あると思われるのである（もちろん、たいていの人には目に一丁字もなかった）。公文書を草書で書いた辺り、第2次南スラヴ影響以降のロシアの状況と共通する。彼の地でも草書で書いていた（草書と скоропись 「早書き」ぐらいの語義 の訳語「草書体」が同じ語だからということではない）。但し、日本には唐様と御家流の区別があり、事情はより複雑になっている。

現在の状況は全くの逆である。書体に関する、現代とのこの相違はどのように生じたか。

綺堂がこれを書いたのは 1919 - 20〔大正 8 - 9〕年頃²¹であった。このようなシフト——文化的シフト——が生じたのはまさに明治年間であった²²、と言える。明治大帝がピョートル大帝と、明治期とロシア 18 世とが比せられる、のは故なきことではない。

むろん、識字率の上昇、筆からペンへという筆記具の変化も大きく影

²⁰ 勘亭流 = 装飾

唐様 = 知的 「晴れ着」

御家流 = 公的 「普段着」あるいは「よそ行き」

²¹ 俳誌『木太刀』にて連載。1922〔大正 11〕年に贅六堂より単行本として刊行。詳しくは [岡本 2001:408]。

²² 1891〔明治 24〕年 11 月 17 日、「小学校教則大綱」制定。本大綱で習字教育の目標・方法等が規定され、行書を主とし、楷書を従とする、とされた。1900〔明治 33〕年の「小学校令施行規則」になると、読書・作文・習字が統合され国語科となり、習字は書方となって独立教科の位置を失った。書体は楷・行書で、一年から楷書に近い行書を習う。なお、玉木愛石といった書家が政府の任をうけて国定教科書を揮毫している。考慮すべきファクターである（以上 [大阪府教育センター] 作成の年表による）。

響していた。このシフト過程の詳細な分析、それをふまえての彼我的対照が今後の課題となる²³。

かつての

草行書 = 「普段着」

楷書 = 「晴れ着」

から

隷書 = 「盛装」 儀式

草行書 = 非「普段着」 (= 晴れ着)

楷書 = 「普段着」

となった。普段着るのが普段着である。楷書があれば良いのである。ここでも実用一辺倒の近代が現れている。(印刷にあっては、明朝体があれば良い。印刷の問題はまた別の大きな問題である。)

5: 文化の変化のあらわれとしての書体

書体は、衣裳と同じく、記号論的機能を果たす。そして、ロシアの事例は、書体の変遷が文化の変化(記号論的改革)であることを示している。書体は言語そのものの単なる反映でもないし、その変化も単なる外的形式の変遷だけではないのだ。言語が変化しても書体は必ずしも変化する必要はない。ただし、言語の変化は影響するだろうし、人為的な介入もありうる。一方、書体が「自律的」に変わっていくことはある。いずれにせよ、そこに記号論的機能を認めることができるのである。

ボガトゥイリョフは言う。「衣裳の変化は、生活構造全体の変化

²³ 明治初期の小学校では文字教育に石筆・石盤が用いられていた。原は「石筆・石盤の筆跡こそが、もしかしたら近代金釘流の元祖なのかもしれない」[原 1997: 126]とし、その後、ペン、洋紙、鉛筆などが「筆跡」に与えた影響を検討している。確かに、石筆では草行書を書くことは出来まい。楷書の流行も「マテリアルな条件」[同書: 136]に由来するのだろう。

衣裳の新たな機能の出現をもたらすような変化 の一部分にすぎない。また、数々の機能をもつ衣裳も生活の一般的構造 とりわけ民族の世界観や経済システム等々にもとづいている構造 の一部分にすぎないために、構造がすっかり変化してしまうと、その構造の一部を人為的に保っておくことなどではしないであろう」[ボガトウイリョフ 2005:132]²⁴。こうしてボガトウイリョフは「わたしたちの衣裳」「〔それが有する〕情緒的ニュアンス [ボガトウイリョフ 2005:19 章]²⁵という概念に至る（参照：[桑野 2005:28-31]）。

たとえばロシア 18 世紀の書体変化が、ロシアの構造全体の変化の一部であることは間違いない。そして、そのようにして出来た新しい世俗文字を新しいロシア人達が「わたしたちの」と感じ、そこに情緒的ニュアンスを見出していたことも確かである（例えばトレジャコフスキー（1703-1769 年）の正書法論に明瞭に現れている²⁶）。言語の構造全体の変化と書体変化が関わるとはハッキリとは言えない。言語が変わっても（文字そのものは変わるであろうが）書体が変わらぬことはあり得る。だが、書体が「別構造をともなった別環境に入ると、この別構造の要求に応えるような位置をそこで占めることになる」[ボガトウイリョフ 2005:173]か、書体そのものが変わるかするということは言えるである

²⁴ 「衣裳の変化は生活構造の相対的な変化の一部であるにすぎない。変化は、衣裳が以前にもっていた機能すべてを守れとは要求しないが、新たな機能を求めるのである。 / 数々の機能をもつ衣裳も、人々の世界観、経済体系などに基づく生活の全構造の一部であるにすぎないので、構造がすっかり変化してしまうと、その構造の一部を人為的に保っておくことなどではしないだろう」[ボガトウイリョフ 1981:109]。

²⁵ [ボガトウイリョフ 1981] では「われわれの衣裳」「情緒的な色付け」。

²⁶ 「我々の正書法は、固有の (собственный) 自らの (свой) アルファベットを有し〔……〕アルファベットの使用に於いて固有で生来の (сродный себе) 方法を持ち得るし、持っている」。そして、これは「美しい現行の世俗タイプ (прекрасный нынешний гражданский тип) 」であった [Тредиаковский 1849:75-76. 引用文正書法は現行のもの]。彼にあってはピョートルの文字を使うことは国を愛することでもあった（参照 [Comtet 1999: 15]）。

う。ロシアの書体変遷史はその具体的な事例であった。

以上のような見解は、他国（たとえば日本）の事象の解釈に有効である。但し、ロシアにあっては、ピョートル期に明確に見られたように新旧・聖俗・ギリシア西欧といった二元的対立が判然としていた。日本の事情に、ロシアでのような二元的対立構造があてはまるのか、検討が必要であろう（何かしらの図式にまとめざるを得ないにしろ、むしろボガトウイリヨフのあげる衣裳分類のように3 - 4分類となろうか）。ロシア以上にパラメータを導入しなければならない。多元的な考察が必要なのだ。むろん、筆記具やタイプライターなど、「マテリアルな条件」

そしてテクノロジーのファクターも考慮しなくてはならない。

書体の問題は、仮名遣い・正書法とからむので事情は複雑である。更に、「服装の規範というものは存在する」[エーコ 1972 : 32]。書体にも規範がある。規範があるからこそカリグラフィーが成り立つのである。この時、手書きか活字・ワープロかという要素も関係する。とりあえず

手書き カリグラフィー 個人 ↔ 印刷 規範的な書体 社会性

といった図式は想定される。

いずれにせよ、書体を衣裳であり文化のあらわれとみなすことは有効なアプローチである。日露双方の「書体の文化史」をふまえた考察を今後の課題としたい²⁷。

文献

Comtet 1999 — Comtet R. Norme graphique et orthographique dans la reflexion linguistique russe au XVIIIe siècle // Histoire Épistémologie

²⁷文字の文化史を知るとは言語学習にも有益である。非日本語話者の日本語学習者にとっては難関の一つが日本語の複雑な書記体系であり、その由来を知るとは学習の助けとなる。非ロシア語話者のロシア語学習者にとっても障碍の一つは文字であった。ロシアの文字に関する知識は「日露新時代の社会的・言語的現状に対応したロシア語教育文法」の一つの分野となる。

- Langage.—Pariss;SHESL, Saint-Denis; PUV—1999.—21/I.—p.5-25.
- Hughes 1998 — Hughes L. Russia in the Age of Peter the Great.—New Haven; London: Yale University Press.—1998.
- Григорьева 2001 - Григорьева Т.М. Новая жизнь старой орфографии// Жизнь языка: Сб. ст. к 80-летию М.В.Панова.-М., 2001.-С. 399-405.
- Живов 1986 - Живов В.М. Алфавитная реформа Петра I как семиотическое преобразование // Ученые записки Тартуского гос. Ун-та. Труды по знаковым системам XIX. Семиотика пространства и пространство семиотики.-Тарту, 1986.-С. 54-67.
- Тредиаковский 1849 - Тредиаковский В.К. Разговор между чужестранным человеком и российским об орфографии старинной и новой и о всем, что принадлежит к сей материи // Сочинения Тредьяковского. —Т.3.—СПб., 1849.—С. 1—316.
- Успенский 1994 - Успенский Б.А. Краткий очерк истории русского литературного языка (XI - XIX вв.).- М., 1994.
- Филякова-Меньшов 2002 - Филякова Е., Меньшов В. Русская письменность.- М., 2002.
- エーコ 1972 - エーコ 「服装は生きている」 ジョルジョ・ロマツツイ編、大石敏雄訳 『モードは語る：服装とコミュニケーションの理論』(サイマル出版会、1972年):11-36頁。
- 大阪府教育センター - 大阪府教育センター「平成14年度 学習指導要領の変遷」「国語(書写), 芸術(書道)」年表 pdf ファイル：
<http://www.osaka-c.ed.jp/hensenpdf/hensen.htm> 内。
- 岡本 2001 - 岡本綺堂著 今井金吾校註 『風俗江戸東京物語』 河出書房新社[河出文庫]、2001年。
- 桑野 2005 - 桑野隆 「機能・構造・記号そして笑い ボガトゥイリョフと民衆文化」 ボガトゥイリョフ著 桑野隆・朝妻恵里子訳 『衣裳のフォークロア 増補・新訳版』(せりか書房、2005年):7-41頁。
- 小林 2004 - 小林潔 『ロシアの文字の話 ことばをうつしとどめるもの』 東洋書店、2004年。〔ユーラシア・ブックレット57〕
- 小林 2005 - 小林潔 「ロシア文字をめぐる諸問題——ロシアの言語

- と文化の理解に向けて——」 『外国語教育論集』第 27 号（筑波大学外国語センター、2005 年）：161 - 168 頁。
- 田嶋 1984 - 田嶋一夫 「漢字シソーラスの構想と課題」 『日本語学』第 3 巻第 3 号（明治書院、1984 年）：61 - 68 頁。
- 野村 1984 - 野村雅昭 「同字と別字のあいだ」 『日本語学』第 3 巻第 3 号（明治書院、1984 年）：23 - 31 頁。
- 林 1984 - 林大 「字体・字形・書体をめぐって」 『日本語学』第 3 巻第 3 号（明治書院、1984 年）：10 - 15 頁。
- 原 1997 - 原子朗 『筆跡の文化史』 講談社〔学術文庫〕、1997 年。
- 菱沼 1984 - 菱沼透 「中国の標準字体と日本の通用字体」 『日本語学』第 3 巻第 3 号（明治書院、1984 年）：32 - 40 頁。
- ボガトウイリヨフ 1981 - ボガトウイリヨフ著 松枝到・中沢新一訳 『衣裳のフォークロア』 せりか書房、1981 年。
- ボガトウイリヨフ 2005 - ボガトウイリヨフ著 桑野隆・朝妻恵里子訳 『衣裳のフォークロア 増補・新訳版』 せりか書房、2005 年。

（こばやし きよし）

本稿の執筆に関して科学研究費補助金（基盤研究(B)17320082）を利用しています。

KOBAYASHI, Kiyoshi. *Changes of Typefaces and Changes of Cultures in Russia.*